

上古代日本の歴史 こぼれぼなし 余 聞

阿刀 弘敬

青山ライフ出版



## まえがき

歴史は科学する学問である！ とはよく言われる言葉です。この言葉は一体どういう意味なのか？ 理解できない時期が長くありました。長ずるに及んで何となく理解できたかなと思う時期もありました。“これはもう格言である”と確信をもって納得できたのは恥ずかしながらごく最近のことです。『歴史事象（実像）の発生原因と結果とを論理的に矛盾なく推理考察する行為。そのための能力が要求される分野。能力とは事象の分析検証をおこなった結果に対して客観的評価を下しうる能力。換言すれば、科学的に矛盾なく分析した歴史事象を論理的に表示表現する「行為』』であると、今このように理解し納得しています。

本書は、以上の「行為」を心掛けて綴ってきたつもり散文集から、テーマ六篇を選び、それら書式をそれぞれの内容に応じて論文も<sup>\*</sup>ど<sup>\*</sup>き形式に書き改め、それらを纏めて冊子に整えて世に問うことにしたものです。

しかしながら、「行為」に対する理解と納得とは裏腹に“主観による偏った論理展開満載の論文もどき散文集”となってしまいました。

謂わば“歴史読本”なのです。タイトルを付けるとすれば“『上古代日本の歴史余聞』”ってところでしょうか。

このようなスタイルの“読みもの”が有ってもよいのではないかと類も見当たらないようですから。そんなわけで、ここにご披露申し上げた次第です。ご笑読いただきご批正を仰げますならば幸いです。

古代史上未解決・難問テーマはいくつかありますが、とりわけ万世一

系の皇統譜に関するそれはその研究対象から除外されてきた感があります。

この未解決・難問テーマに挑もうと思いました。そこで難攻不落の城門を開放するすべを模索しました。

まずは、「古事記」（以下「記」）と「日本書紀」（以下、「紀」）の記述内容を通読した結果ですが、同じ事跡案件（皇統譜の正統性）に限って言いますと、その内容に余りの“真逆度合い”のギャップが認められたところに疑問を抱いたことでした。この疑問は「記」の『胎中天皇』と「紀」の『神の啓示』の内容にありました。

無論、「記」が天皇の国土支配や血統の正統性を知らしめる必要から国内向けに、「紀」が唐や新羅などの隣国に対して通用する日本国の正史を示す必要から国外向けに視点を置いて編纂された内容になっているということは承知しています。これは首肯できることです。そこで、全編にというのではなく、件の案件のみに限ってですが、つぶさにこの両書の内容を検証してみますと、そこには、矛盾が認められたのです。前者は理論上完璧な非の打ちどころの無い主張となっています。

「記の内容は“整い過ぎています。過ぎていて作為さえ感じます”と。一方、「紀」のそれは、一見、自然の摂理に反する生理学上ありえない事象を記述しています。加えて、一部ながら論理矛盾をきたす記述もあります。この事実は普通に考えれば、国内向けと国外向けに編纂された『記』と『紀』の内容は入れ替わっている方が良いと思うところなのですが、現実には件の如しですから疑問も湧くというものです。

天武天皇（以下、天武）の「紀」編纂の発案に当たっては、その時期より前に既に天皇家の「記」が存在していたわけですから、担当者は「記」に目を通したはずですが。その内容は天武にも届いたはずですが。いや、むしろ、天武はこの時点で、「記」の側の人ですから、当事者です。その内容を熟知されていたと思います。にもかかわらず、「記」が対国外に通用しないとの判断があつての「紀」編纂に至ったということでしょう。そうだとすればですが、「記」のどこの箇所が何故通用しないのか？示されていけませんので疑問は深まるばかりですが、何故か「紀」を決断

された天武のお人柄に“誠実さ”を強く感じます。

“天武天皇のご決断の過程に何が有ったのかは知りたい！”とこんなことを心に秘めながら本稿を書きすすめることにしました。

このテーマの検証は本録 51 頁第 3 章『万世一系の皇統譜の存在証明』に述べました。ここでの結論は不落の門を開放せしめえたことを確信させたことであると同時にまさしく歴史が科学する学問であることを実感させたことでした。

これは、理系出身だからできたのだと言う人がいますがそれは正しくありません。中途半端ではありますが齧<sup>かじ</sup>った文系の恩恵を被っているからだろうと言う人の言葉には傾聴に値する箇所があるかも知れません。

この結論導出過程を振り返ってそのように思います。しかし、正直なところを言いますと、『理系、文系に関係なく、また、最高学府の就学経験<sup>あ</sup>有<sup>なし</sup>る無にも関係なく平常時に経験する事象を捉えこれを分析し表現する訓練を積み備わる能力であると思われる。この能力を身に着けるために日常の生活の中において積み重ねる不断の努力は必要かと思われるが、これを重ねさえすれば報われる学問・歴史学である。』などと、偉そうな事を言ってしまいましたが、実は、筆者は在野の学研でもなく象牙の塔の学者でもありません。古代史分野に興味を抱いている所謂単なる“歴史愛好家”です。文章作法に不安内のため内容は普遍性に欠けています。主観に偏った論述展開となっています。ご寛容頂きますようお願いいたします。

ここで、先学・“天照大御神が耶馬台国女王卑弥呼である”と主張する論者、闕史八代説信奉者、及び万世一系の皇統譜の存在を認めない御用学者の方々に願うことがあります；件の格言“科学する学問”は身体に沁みついておられる先学と拝察します。それゆえ、以下述べる三国志「魏書」の注釈本「裴注」(裴松子之注)に関心をお寄せいただけたらと願う者です。その内容をご容認いただけますならばご主張のご見識内容は再考へと誘われると確信いたします。そこで、僭越ですが、「裴注」について以下述べてみたいと思います。ご清聴よろしくお願いいたします。「裴注」の著者裴松子<sup>はいしようし</sup>(372～451年)は中国南朝宋の劉裕(武帝)の

配下の有能官人として国政に参画しましたが歴史家でもあったため、武帝の後を継いだ文帝に命じられて429年三国志の「注」を編纂しました。これによって“注釈者”として名を残した人物とのことです。彼は二百種もの史料を用いて注釈を入れたと伝えられています。三国志は三世紀西晋の陳寿がまとめたものであることは、先学の皆さま既にご承知のことですが、「魏書」「蜀書」「呉国」の三志から構成されています。魚羹ぎょかんの著した「魏略」の中身を取り入れ新しい東方の情報をくわえてより正確な国史に仕上げ「魏書」としたそうです。しかしその記述量のうち「倭人」の条は全体量の1/300と少なく、「魏書」末尾に、「魏志倭人伝」は加えられているにすぎません。所謂『三国志卷三十 烏丸鮮卑東夷伝「倭人」の条』です。

裴松子の「魏書」注釈書中の原本「魏略」の「倭人」の条に付された「注」に解説を施した文章「裴注」は我が日本人にとっては極めて貴重な歴史資料となっています。我が国の皇紀年を暦年に変換することで実年表記が可能となり真実の上古代史の解明がこの「裴注」によって進展したことに疑う余地はないでしょう。つとに有名な箇所一文はこれを掲げますと以下のごとくです；『男子無大小 皆鯨面文身。 自古以来、其使中国、皆自称大夫。

———〔一〕見大人所敬、但 手以當跪拜。其人壽考、或百年或八九十年。———』裴松子之「注」；

“〔一〕其俗不知正歲四節但計春耕秋收為年紀”と注釈を付しました。この文章の訳文を、いき（壱岐）一郎編訳「中国正史の古代日本記録」葦書1984年、59頁及び65頁から引用しました。【（原注、「魏略」本はこういう。倭人は正月四季を知らない。ただし春耕秋収を数えて年数としている、と。） 有力者を尊敬する方法はただ手を打つだけで、これは中国の跪拜きはいに当たる。人の寿命は倭人の計算で百年<sup>26</sup>、あるいは八、九十年という。

(25) 五世紀、南宋の裴松子之の注。

(26) 今の一年を二年に数える二倍年歴か。

(27) 実際には五十年（歳）か。】(B1) (59)

耶馬台国の時代を下る 200 年の時代にさえ倭国に“二倍年歴”“春秋年”が存在していたと裴松子が記録した事実は彼が生きた時代にさえ生き続けていたと考えられますから現在に生きる我々にとっては極めて重要な意味をもたらします；「紀」記載の皇紀年を春秋年説を採用し暦年に変換して神武天皇御即位年\*1)を推算しますと紀元前 70 年（以降、BC70）と推定できます。このことにより御生誕年は BC96～BC97 年と算出できます。この結果は「裴注」の有効性を証明しています。「裴注」は以下の古代史の未解決テーマへの挑戦を可能にしました；

- ①：神武天皇御寶算年\*3)の算出
- ②：神武天皇東遷説の合理的説明
- ③：万世一系の皇統譜の存在証明
- ④：“天照大御神が卑弥呼である”説を否定する合理的説明
- ⑤；『大日靈女貴尊』を『天照大神』（記紀）としたことについて：
- ⑥：“仮説『スサノオ徐福孫説』（筆者説）”

以下、その恩恵を具現します。

付記：引用文は活字ポイントを 1 ポイント下げ『 』でくくった。

引用文中の下線部分は筆者。

引用文の後に付した（ ）内英文字及び数字は引用文の著者記号（著者名対応記号は本録最終頁の「引用・参考文献一覧」に掲げた）、及びその引用文の掲載頁の最初の頁を表している。図版・系図・表等挿図一覧の〈 〉内数字は、掲載頁を表している。

## 目次

まえがき	3
目次	8
図版・系図・表等挿図一覧	10

## 第 1 章

神武天皇御寶算年（在世年 * 2）の算出	11
(1) 春秋年を使用しない推定法	11
(2) 春秋年を使用した即位年の決定法；	32
(3) Microsoft Excel を利用した神武天皇生誕年の算出結果を表示する。 …	47

## 第 2 章

神武天皇東遷説の合理的説明	49
---------------	----

## 第 3 章

万世一系の皇統譜の存在証明	51
(1) 皇統譜の連続性に対する私見	51
(2) 現在の皇統は南朝か北朝かについて；	78
(3) 122 代明治天皇は本当にすり替えられたか？	82

## 第4章

“天照大御神が卑弥呼である”説を否定する…… 101

## 第5章

おおひ るめ あなむちのみこと あまてらすおおみかみ  
『大日靈女 貴尊』を『天照大神』としたことについて… 111

## 第6章

“仮説『スサノオ徐福孫説』（筆者説）” …………… 133

あとがき…………… 175

引用・参考文献一覧…………… 180

掲載主要挿図原本…………… 185

## 図版・系図・表等挿図一覧

1. 図—22 天皇代位と皇紀・実年の崩御年比較  
(長浜浩明氏作成) (H) (223) <34>
2. 表— 1 古代天皇実年換算基礎資料  
(長浜浩明氏作成) (H) (212) <35>
3. 表— 2 上古代天皇推定御在世年 <御生誕年～御萬歳年>  
(1. 図— 22 (H) (223) より推定在世年を筆者算出) <36>
4. <資料 1> 阿刀宿禰宗家血統相承譜 <37>
5. <資料 2> 阿刀宗家血統相承譜部分 <38>
6. 図版 1 (A)  $Y = \alpha X$  曲線 図— B <全体図> <39>
6. 図版 1 (B)  $Y = \alpha X$  曲線部分図 ④ <39>
7. 図版 2  $Y = \alpha X$  曲線部分図 ① <40>
8. 図版 3  $Y = \alpha X$  曲線部分図①の部分拡大図 <66>
9. <資料 1 (A)> <「古事記」「日本書紀」及び「先代旧事本紀」からの合作系図> <43>
10. 表— 3 <天皇生誕年 (Y) の算出過程一覧> <46>
11. <天皇家ライン> / <元東寺執行家ライン> byEXCEL 算出表 <47>
12. 武内宿禰 / 神功皇后系図 <63>
13. 表— 4「記紀」からの情報値(生誕年、即位年、崩御年、御萬歳年)一覧 <70>
14. 北朝系皇統系図 <78>
15. 表— 5 <天皇在世年及び崩御年齢 (99～126代) 一覧> <91>
16. 図— C <上古代ライン  
(天皇家、元東寺執行家 {A～C} 安本美典説))> <107>
17. <日向王朝王統系図> <118>
18. <資料 1 (B)> <日向 出雲 三輪 (仮称) 王朝王統系図> <119>
19. <出雲王朝変遷図> <136>
20. スサノオ＝徐福孫説証明のための推定在世年比較一覧 <145>